



大阪市立大空小学校 初代校長

木村泰子

Yasuko Kimura

障がいのある子もいない子も、みんなが同じ教室で学び、互いに刺激を受けながら成長していく。そんな理想を実現した「奇跡の学校」、大阪市立大空小学校。大空小学校の日常は、ドキュメンタリー映画『みんなの学校』として公開され、四年たった今でも全国各地で上映され続けている。その大空小学校初代校長として、理想の実現に奔走した木村泰子さん。木村さんは「大空小学校でできたことはどこでもできる」と事もなげに語る。学校とは？ 学びとは？ 学力とは？ 木村さんへのインタビューは、教育の基本をあらためて考えさせるものとなった。

すべての子の学習権を保障する

「みんなの学校」を率いた校長の挑戦

障がいがある子も、そうでない子も、
一緒に教室で学ぶ

—— 木村先生が教員になられた
一九七〇年当時、私は小学生で
した。その頃の先生は「怖い」
存在でした。

木村 七〇年代の多くの小学校
では、どれだけ多くの知識を効
率よく生徒に教えていくかで先
生の良し悪しをはかる風潮があ
りました。先生はただ「正解」
を教える、生徒も親も物申せ
ない存在でした。逆に、先生が
そうした教育をするのに差し障
りのある子、例えば重度の障が
いのある子は、通常の学校にい
なかつたはずですが、それは「い
なかつた」のではなく、障がい

のある子どもが学校でみんなと
同じように学ぶ「当たり前がな
かつた」んです。そうした障が
いのある子に平等に教育の機会
が保障されるようになったの
は、昭和の終わり頃。平成に入
ると、それが「特別支援教育」
に変わっていきます。

—— 最近ようやく、障がいのあ
る子も、そうでない子も共に学
ぶ「インクルーシブ教育」とい
う考え方が広がってきました。

木村 日本でようやく特別支援
教育が始まった頃、世界ではす
でに新たな理念であるインク
ルーシブ教育が提唱されていた

んです。日本政府はユネスコ(国
連教育科学文化機関)に、イン
クルーシブ教育を進めると約束
しているのですが、現状は「学
校に特別支援学級がやっとでき
た」程度です。でも、特別支援
教育が導入されても結局、障が
いを理由に、みんなが一緒に学
ぶ機会をつくることができてい
ない。障がいの有無にかかわら
ず、みんなが一緒に学ぶことの
大切さは理解されているはずで
すが、実際は「特別なケアが必
要だから」という名目で障がい
のある子とない子を分け隔てし
てしまっているのです。

—— 大空小学校では、特別支援
教育の対象となる子も、そうで
ない子と同じ教室で学びます。
木村先生が初代校長に就任され

るにあたって、当初からイン
クルーシブという考え方を現場
で実践しなければという思いが
あったんでしょうか。

木村 そもそもインクルーシブ
という言葉すら知りませんでし
たし、開校から九年間校長を務
めました。インクルーシブとい
う言葉を使ったことすらあり
ません。周りの皆さんが大空小
学校の教育をそういう言葉で伝
えてくださっただけなんです。
大空小学校は理想の学校とか奇
跡の学校と言われますが、本当
に普通の小学校です。

—— 木村先生が校長を務められ
た大空小学校は、大規模な小学
校が分かれてできた学校とか。
木村 元々一〇〇人以上の生
徒がいるマンモス校があったの

ですが、生徒数が増えて教室が足りなくなつたんです。それに対応するために新設された学校が大空小学校でした。ただ、当時、住民の地域へのこだわりや区割りの関係などで二〇年以上ももめて、大空小学校はやつと開校したんです。その過程では、大人たちが自分の嫌なもの、困るものを排除する空気がまん延していました。この空気は、まさに大空小学校を開校するまでの間、大人たちが持ち続けていたものだと思つたんです。地域や人を「くくり」で決めつけて見ていたように感じました。そういう態度を大人が見せていたら、それが子どもに伝わり、学校も、ひいては地域も衰退すると思ひました。そこで、学校関係者や地域の偉い方が集まる会合で、「皆さんが良い地域に暮らしたいと思うなら、この大空小学校を良い学校にしましょう」と、もつと偉そうに言いました(笑)。

——新しくできた学校に赴任する校長先生としては、非常に勇気のいる行動ですね。

木村 校長の責任はただ一つ、「学校のすべての子どもの学習権を保障する」ことです。その責任を果たすためにはどうしても必要なことだつたんです。重い障がいがあるうと、家庭が貧困であろうと、つい友だちに暴力を振るってしまう子であろう

学校は「みんな」が主体的につくるもの

——うらよ 紆余曲折を経て、大空小学校が開校したのは二〇〇六年です。

木村 新しい学校ができることに反対の声もお根強い、完全アウエーでのスタートです。「絶対に良い学校にしよう」と教職員が誰かが意欲をかき立てました。

子どもたちは全校で一八〇人ほど。大空の校区外からも、学校に自分の居場所がないという子たちが大勢来たんです。

その中に、一年生の時の最初の二週間しか学校に通っていないという、当時小学六年生の子がいました。六年生まで学校に行けなかった子どもです。この

と、みんな地域の宝です。どんな子も学校では学習権が保障され、その子らしく過ごすことができなければなりません。これはそもそも憲法で定められていることです。特別なことを言っているわけではありません。

子は広汎性発達障害(注)で強いこだわりがあり、食事は白いごはんしか食べられませんでした。小学校に入学して二週間後に始まった給食で出されたキュウリが、どうしても食べられませんでした。でも担任から食べるよう指導され、結局、食えずに帰宅。

先生の指導におびえるようになり、次の日から学校に行けなくなりました。その後、この子はPTSD(心的外傷後ストレス障害)と診断されました。

大空小学校が今のような学校になれたのは、この子がいてくれたからだ、私は思っています。これほど困っている子が安心して学校にいられるようにす

るにはどうしたらいいか。それを原点に、全教職員がチームとなって出発できたからです。

——障がいがある子とそうでない子が同じ教室で学ぶことの意義を、もう少し詳しくお聞かせください。

木村 障がいを、病気のように、治療すべきもの、切除すべきネガティブなものであるかのように捉える向きがありますが、障がいは治すものではありません。その子の特性であり、個性なんです。そういう個性を持つた子と周りの子どもたちが対等に学び合う場が学校です。障がいのあるなしにかかわらずみんな一緒に学ぶというのは、障がいがない子が、障がいがある子のために我慢するという構図ではありません。いつも一緒が当たり前という空気が浸透してくれば、障がいがない子たちが、どうしたら障がいがある子とやっていけるかを自分たちで考えるようになるんです。これは、

(注) 広汎性発達障害/コミュニケーション能力や社会性に関連する脳の領域に関係する発達障害の総称。



きむら・やすこ ● 1950年大阪生まれ。武庫川学院女子短期大学（現・武庫川女子大学短期大学部）教育学部卒業。70年小学校教員に。大阪市立高松小学校、墨江小学校などを経て、2006年から15年まで新設の大阪市立大空小学校校長を務める。すべての子どもを多方面から見つめ、全教職員のチーム力で「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」ことに情熱を注いだ。15年に定年退職後は、全国各地で講演活動や教育研修を行う。著書に『みんなの学校』が教えてくれたこと』（小学館）などがある。大空小学校の取り組みを描いたドキュメンタリー映画『みんなの学校』は15年に劇場公開され、各地で上映が続いている。映画の公開に先立ち放送されたテレビ版『みんなの学校』は13年度文化庁芸術祭大賞を受賞した。

何物にも代えがたい、子ども同士の大切な学びです。大空小学校はこうした学びを最上位の目的に置いていました。

——障がいがない子たちが、障がいがある子から学ぶ。

木村 そうです。大空小学校を巣立って、大学生や社会人になった子たちに会うと、「大空小学校でいるんなやつと一緒に学んだおかげで、自分たちがものすごく得をしている」と言います。自分の思い通りにいかない人たちと接する際、避けたりせ

ず、どうやったら良好なコミュニケーションを取れるかを考える癖がついているんです。こうした力は点数化できる「見える学力」ではありません。「見えない学力」として社会に出てから生きて働く力なんです。この「見えない学力」を、学校でどうやって伸ばしていくかが問われるのだと思います。

——新しい学校をつくり上げていくにあたり、実際に生徒と接する教職員の方々には、何を伝えたいのでしょうか。

木村 私が最初に教職員の全員に伝えたことは、「すべての子が安心して学べるように、学習権の保障を大空小学校における最も上位の目的に掲げる」ことです。この目的に反対できる人は誰一人いませんよ。そして、目的を達成するための手段は問わないということも併せて伝えました。手段はみんなで考え、つくり上げようと。教員だけでなく、給食調理員や事務職員などすべての教職員で考えました。でも誰からも案が出てこないんです。その負担や責任が全部自分に降り掛かってくるんじゃないかと思つたのかもしれない。

そこで、子どもの学習権の保障を脅かす悪しき習慣を挙げることにしました。そうしたら、出るわ出るわ（笑）。みんな山のように挙げてくれました。——そうした悪しき習慣のない学校にしよう。

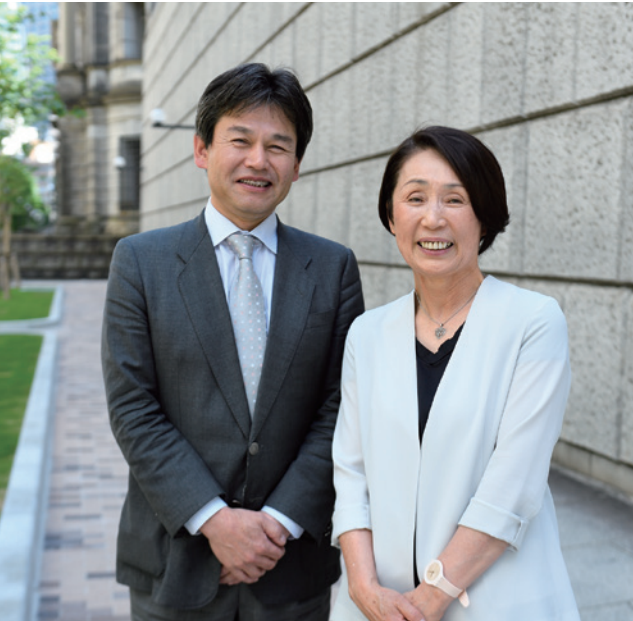
木村 断ち切っていったんです。過去をベースに改革することは難しい。うまくいかないとは、過去にしか戻るところがないか

らです。でもゼロベースでつくれば、失敗しても戻るところがないので、自分たちで考えながらつくり直すしかない。

子どもは、学校があるから学校に行く——これは過去の考え方です。学校はそこにあるものではなく、つくるものなんです。誰がつくるか。学びの主体である子どもが、自分たちが学ぶ学校をつくる。保護者が、自分の子が学ぶ学校をつくる。地域住民が、地域の宝である子どもたちが学ぶ学校をつくる。教職員が、自分が働く学校をつくる。こうした主体的で、当事者意識を持った「自分」たちが集まり、試行錯誤しながら「みんなの学校」をつくっていくんです。

——大空小学校に校則はなく、子どもたちは「自分がされて嫌なことは人にしない、言わない」という約束が一つあるだけだから。

木村 すべての子どもの学習権を保障できる校則は考えられませんでした。校則に子どもをばめ込もうとする。破ると罰則がある。でも、人は約束を破って



公立小だからこそ、 どんな実践もできる

——保護者の方や地域の方には、どのように向き合ったのでしょうか。

木村 私が校長になってから、

しまうものです。実際、子どもたちは約束を破るんです。人を傷つけたり、不快な思いにさせたり、学校の中で毎日経験します。そのときは「やり直し」をする。約束を破ると、子どもは校長室にやり直しに来ます。心底納得していないと、またやり直し。自分のためにやり直しが

できたかどうか、大事な分かれ目です。子どもたちは案外正直に「やり直し」をするんです。子どもが主体的にやり直しをするのは、学校の中に怒号も力による強制もないからです。失敗してもやり直しができますし、大人が「いつでもここにいますよ」と待っているからだと思います。

月に一回、スクールレターを地域の回覧板で流してもらいました。

原稿はすべて校長の私が書きまします。良いことは一つも書きません。困っていること、うまくいっていないことをどんどん発信しました。今、しんどい子がいっぱいいるんです……。回覧板ですから、保護者はもちろんですが、その地域の人も読みます。そうすると、読んだ方が、ひとり、またひとりと学校に来て子どもたちを見てくれるようになり、その輪が広がっていきましました。大事なのは教職員と保

護者、地域住民で「一緒に」子どもを育てること。いつでも学校に来てください。困っている子がいたら寄り添ってください。学校はいつもオープンです。私は大空小学校の入学式で、保護者の皆さんに毎年、同じ話をしていました。「学校には自分のお子さんのほかにたくさんの子がいます。皆さんは、今日から大空小学校の子どもたちの『サポーター』に変わっていただきます」と。

——学校では自分の子ども以外にも目を向けて欲しいと。

木村 そうです。「自分の子を育てたかったら、自分の子の周りの子を育てに学校に行こう」という合言葉もできたんです。

自分の子がいじめられていたら、いじめている子に寄り添う。その子に信頼されたら、なせいじめたかを語り始める。他人事が自分事になっていくんですね。これも大きな学びです。

——公立の小学校は、私立に比べて何かと制約が多いように思えます。こうした取り組みがよかったです、という声はありませ

んか。

木村 テレビや映画で大空小学校のドキュメンタリーが流れて以来、それがいちばん多い感想ですね。そのたびに、「公立」の意味が誤解されていると感じます。校風があり方針が決まられている私立とは違って、税金で賄われている公立の学校というのは、「すべての人たちのもの」でしょう。その目的を達成するためであれば、本来、どんな実践も可能なはずなんです。みんなの学校だからです。

ただ現実には、さまざまなしがらみがあります。その時に、「学校は誰のためにあるのか」という原点に立ち返ること。すべての子どもが安心して学べる学校をつくる——その目的のためにはいかなる手も尽くす、という覚悟があるかどうかが大事です。その覚悟さえあれば、大空小学校でできたことは、全国どこでもできると確信しています。

——本日は興味深いお話をありがとうございました。

(聞き手/情報サービス局長 中川忍)